

	「なごや歴まちびとの会」	日時	平成 26 年 3 月 29 日（土） 10：00～11：30
康全寺本堂改修工事見学会報告書		場所	西尾市満全町 36 参加者 19 名
		<p>年度、最後の見学会は矢作川流域の南端、抹茶の生産で名の高い西尾へ飛んだ。そこは西尾市の商店街の突き当たりにある西尾山康全寺である。応永 5 年（1398）西条城境内にあった八幡六坊のうち釈迦堂、大日堂を移して、吉良山満全寺となった。天正 9 年（1581）徳川家康が寺に止宿し、その折り、家康から一字もらい西尾山康全寺と改め、天正 13 年、西尾城改築の際に現在地の満全町に移し、禅寺としたと伝えられている。尚、家康の西尾への縁はかつては松平元康と名乗っていた時代の今川義元の討死までさかのぼる。「三河物語」に永禄 3 年 5 月 19 日の桶狭間の戦いの後の三河統一戦で「西尾の城」を得とある。</p>	
		<p>通りから右手に折れて、薬医門となる山門を南から入ると千坪ほどの境内の正面に改修中の本堂が姿を現す。2 枚目の写真にあるように寄棟棧瓦葺きで軒までの高さより、そこから棟までの瓦の方が高い重厚な大屋根を持つ。着工から、ほぼ一年で大屋根が葺き終わって、内部の床・壁・天井等の改修中に見学をさせて頂くことになった。施工はいつもお世話になっている（株）魚津社寺工務店である。本堂は横長の前土間より、堂巾もある縁に上がる。既に、土間の両脇には補強の格子壁が抱き柱により取り付けられている。中央の大間から右が上の写真でその下に格子壁の耐震補強部が確認できる。耐震補強部分は建物の 4 隅に大きな格子壁で施工されている。伝統建築の補強方法には大変参考になり、意匠的にも違和感はないような格子の形となっている。建物は正面から対称に貫かれており、天井は棹縁天井で格式を守っている。が、本堂の最大の特徴は大間正面の丸柱と内法に虹梁を配しての彫刻欄間で厳かで崇高な空間をも感じさせる部分である。それが下の写真であり、奥に見えるのが渡りからの別棟になっている位牌堂・開山堂である。このような改修は古材の再使用、取り換え部分などが多々あることから、説明を受けないと解らない部分も多くて、現場の説明を暫し、皆で聞き入ることになる。</p>	
		<p>葺きかえられた大屋根は荘厳ではある。棟や軒先瓦にはそれぞれ文様が施され、その格式を伝えている。さらには、大棟や降棟に見られるこれでもかの鬼瓦・棟端飾瓦には魅せられる。通常、魔除け、火伏せの意味を持つとされるが大棟には龍の字の文様が施された鬼瓦と解明がされたと</p>	



聞く。火除けなら、さもありませんと思うがこの康全寺には昔々の物語がある。この境内にある大日堂の天井画には巨大な龍が描かれている。ある時、火事になって町全域に広がる大火災が発生した時にこの龍が現れて勢いよく水を噴いて火災を防いだと伝えられる水吹き龍の話である。西尾の守り神となる康全寺に伝わる物語と結び付けたい。尚、写真下の文様は解明出来ていないようである。唐草文・子葉からの構成要素から、又、水と関連がある事を考えても私には「雨」以外には読めません。さて、みなさんはいかがでしょう？

見学は本堂から続きの位牌堂・開山堂から別棟に移りました。その後、大日堂の見学、十王堂なども見せて頂き、あっという間に1時間あまりが過ぎて行きました。それから、建物から見つかった棟札などを見せて頂きながら御住職の御母堂にお茶とお菓子を頂きました。話も弾み、有りがたく頂戴していると今度はお忙しい中にも関わらず御住職が挨拶にお見えになりました。建物を見せて頂いた上に暖かいおもてなしを受けて、全員がこの日の天気のように暖かい、そして、とても気持ちの良い見学会になったと感じています。これもいつも面倒を見て頂いている、魚津社長のおかげと感謝しております。今回は、担当の赤崎様には長時間に渡っての丁寧な説明でお付き合いを頂きまして本当に有難うございました。3月末ではありましたが、本当に穏やかな気候の中を帰路についた19人の参加者でありました。

(なごや歴まちびと 猪飼幸雄)

